

(7) ミナミクロダイのビブリオ病について

鹿児島県水産試験場

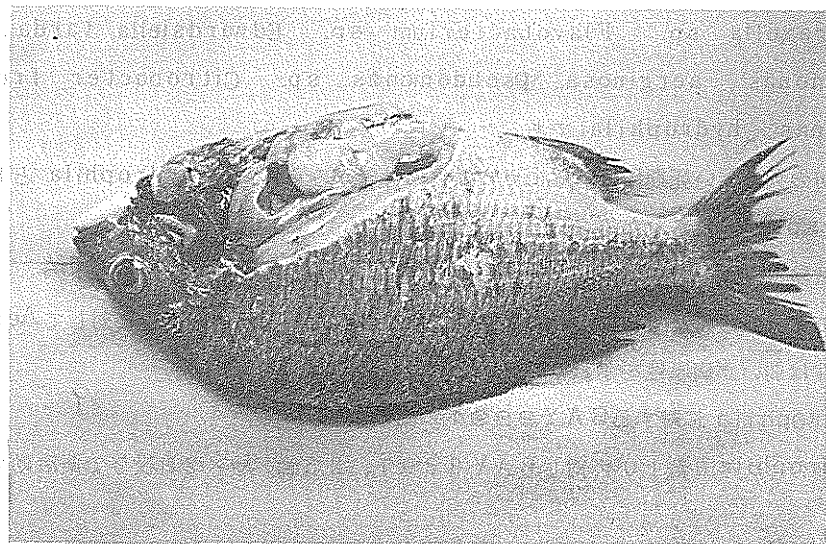
照屋忠敬、多和田真周

1976年3月中旬に採卵、ふ化した放流用のミナミクロダイが陸上水槽で飼育中、6月下旬から7月中旬までに3,000余尾へい死し、8月上旬ごろには1日平均500尾のへい死がみられた。それら罹病魚より *Vibrio* 属と思われる細菌が分離されたので報告する。

1 群の観察及び罹病魚の症状

罹病魚は遊泳力が弱く、群から離脱し池壁面により、体色の黒化がみられた。より重症魚は池底で横転し、死に致る。

症状は図版に示した。特異的な症状は、体側部や鰭に俗にいう「スレ」、症状がみられ、内部器官では肝臓の褐色がみられた。



2 細菌検査

3% NaClが普通寒天培地に罹病魚の肝臓の切片をスタンプして25~24時間培養した。

分離菌は陰性で運動性のある桿菌、チトクロームオキシターゼ(+)、ブドウ糖を発酵的に利用するがガス非産生、0/129に対して感受性がある。TSI試験(A/A)、H₂S非産生、インドール(-)。

その他の性状試験は行っていない。

3 診断及び対策

診断は水産庁編、魚病診断指針のマダイのビブリオ病と比較検討した。

上記の細菌検査の結果より、分離された細菌は *Bergey's Manual* (8 EDITION) の

の *Vibrio* 属とよく一致する。また、疾病の発生時期、及び群の行動、罹病の症状ともマダいのビブリオ病とよくにている。

よってミナミクロダイの疾病はビブリオ病と思われる。

対策として、スルファモノメトキシンNa の 2.5 PPM 3日間長時間薬浴と同じ薬を 15g 水に溶し、ペレットに吸着させて1日2回3日間、径口投与した。